

大道芸通信



編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄　(daidogei@kib.biglobe.ne.jp) http:// daidougei.seesaa.net

日本の生業
擂粉木閻魔ほか

生業（なりわい）とは生活を維持するのに必要な仕事や職業のこと。以前にも紹介したが、中でも傑作と思えるものを紹介する。

一般に、物貰いといえば、余った物を貰うことが多いが、茲に出てくる物貰いは「銭貰い」と呼んだ方が　意味としては正しいのかもここ知れない。然し、それだと余りに露骨すぎるから　今に至るまで「物貰い」という言い方が定着している。そんな物貰い(銭貰い)が　藩政時代は大変多かった。だからだろう　手を換え品を換え、人の懐を当てにする生業が大層発達した。恣意的ではあるが　私が「よくぞ考えた　面白い」と思ったものを逐次紹介したい。

最初は『只今御笑草』が載せる「擂粉木閻魔（すりこぎえんま）」



擂粉木閻魔

閻魔紋日盆
正月
廻礼（まわり）
擂木

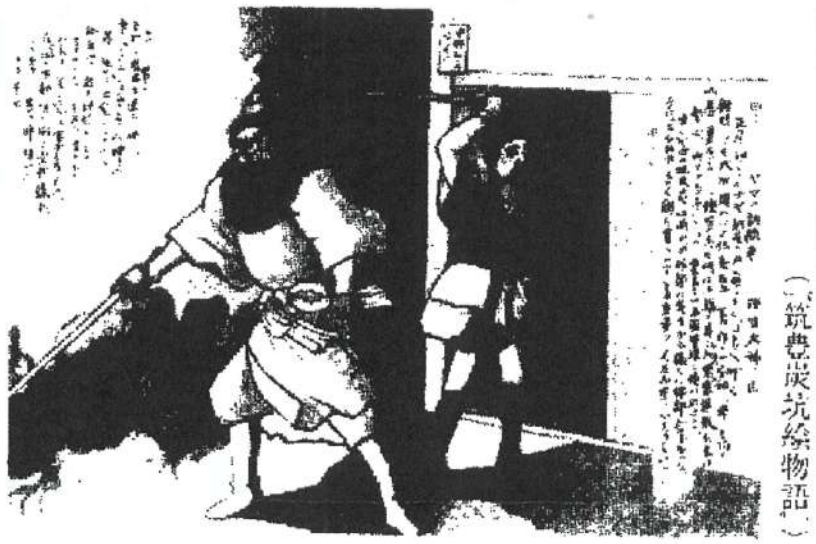
一見したところは　地獄絵の閻魔大王のような姿をしている。しかし　詳細に見ればおかしな処がままある。

直垂（ひたたれ）を着て納豆箱を細工した冠をかぶっていた。顔から手足にかけては紅殻（べんがら）なのだろう。ほかに例えようのない赤を塗りたくり眉も厳つく描いて、手には古擂粉木（ふるすりこぎ）を笏（しゃく）代わりに持っていた。

「十王(＝秦公王、初江王、宋帝王、伍冠王、閻魔王、変成王、泰山府君、平等王、都市王、五道転輪王)が勧進も九王(＝食おう)がため、鼻の下の建立クワッ」

等といいながら目を剥きだし、大口を開けて睨みつけて子供や赤ん坊を脅していた。

明治　ヤマの訪問者　鍾馗大臣



（筑豊炭坑絵物語）

田川市石炭・歴史博物館蔵

鍾馗大臣

時代と場所は異なるが、ユネスコ記録遺産に指定された元筑豊炭鉱夫の山本作兵衛にも似たような話を載せる。但し閻魔ではなく鍾馗大臣（『炭鉱物語』俗称『山本作兵衛ノート』

之は正月十五位まであって藁縄で造ったシメ型の鉢巻を嵌め、手には宝剣の代わりに一尺余りのワラ棒を持って門口に立って屋内には入らない。

右手の木棒で戸口の板や又は柱をカタカタと叩いて気勢をあげ、やあー鍾馗が立った。此の内は悪魔は退散、副神は入来する。やあー福は来る災神を見せて踊り狂うようなこと厄神は逃げ去ったと。そとをしていたが、明和の最後の声は至って太く元気に満ちた叫声であって、如何にも疫病神は逃げそうである。

縁起を担ぐヤマの人達は、笑いを以て之を迎えていた。之は主とし（て）お正月のおカチンを貰うている様であった（『山本作兵衛ノート』）

●赤坂亀（『只今御笑草』）



赤坂亀（『只今御笑草』）

これは道心者（＝仏法に帰依した人）のなかでも、極め付きの愚か者であった。

解き箱を首に掛け鉦鼓を打ちならしながら声高に念仏を唱えていた。

「鉄砲の玉に帆をかけた」と言うのが口癖で、撞木（＝ここでは鉦鼓を打つ槌）を面白く廻しながら、家々の門に立っては米銭を乞うた。

生まれは赤坂某家の御曹司とのことだが、山の手では四谷、市ヶ谷、麹町の辺りまで、下町は新橋、桜田、久保町の辺りまで知られた名物男であった。少し足らないんじゃあなかろうか、との思わせぶり。人が囃し立てたら調子に乗って、着物の前をはだけて陽物を見せて踊り狂うようなことをしていたが、明和の最後の年（九年＝一七七二年）に病死してしまった。

それを哀れむ人がいて、